# 第4章　相（風水師）・法（宅建士）・創（建築士）──三位一体の風水建築思想

## 4-1　思想の出発点──「融合の不在」に気づいたとき

この章を書くにあたり、少しだけ私の人生について触れることにしたいと思います。この経験こそが、これからお伝えする「相・法・創」の根幹となるからです。

私は一度、すべてを失いました。

多くの関係者の方々にもご迷惑をおかけすることになったことは、今でも忸怩たる想いです。会社を経営し、人を雇い、社員や家族を守ろうと必死に努めてきましたが、最終的には責任を取って財産も信用も手放しました。

“勝ち組・負け組”という言葉がもてはやされた時代でした。物質的な考えよりも精神性が大事にと心がけていましたが、それを口に出すことがはばかられる空気の中で、私は表向きの成功を目指して突き進んでいたのです。

しかしその結果、私はいわゆる“負け組”の一人となりました。そしてそのとき、こう心に誓いました──「自分の人生、もう自分に嘘はつかずに生きていこう」と。

私は大学を卒業後、大手不動産会社に就職しました。

実務の世界に足を踏み入れて間もない20代で、宅地建物取引士の資格を取得し、不動産という社会基盤の論理と法を学びながら、多くの取引や都市の開発現場を経験しました。しかし、40代になって「風水」と出会い、それまでの価値観が大きく揺さぶられることになりました。

風水という言葉は以前から耳にしていましたが、深く学ぶことはなく、たまたま手に取った書籍をきっかけに、「土地には氣があり、空間には流れがある」ということを知ったのです。それをどう読み、どう整えるかによって、住まう人の人生にまで影響が及ぶ──私はそう確信するようになりました。

次第に、風水の師匠のもとで教えを授かり、「宅建」と「風水」、この二つを両輪として扱うようになりました。

土地の正当性や法的整合性を踏まえながら、氣の流れも重視する。

宅建士であることは、風水鑑定を行う上で非常に役立ち、不動産のプロが風水と合わせて土地や建物を評価することで、クライアントに強い説得力をもたらしました。こうした鑑定や提案は、表面的には奇異に映るかもしれませんが、実務と精神性が噛み合ったとき、人は深く納得し、安心して空間を受け入れてくれたのです。

しかし、やがて私はある限界に気づきました。

風水で氣を読み、宅建の知識で社会的整合性を確認できても、それを「空間というかたち」にする力が自分にはない──そう、設計・建築の領域が抜けていたのです。

不動産の鑑定までは宅建士で十分対応できますが、クライアントが風水住宅を建てたいと希望された場合、自分の資格だけでは対応しきれず、建築士の力が必要となります。そのため、クライアントに建築士を探していただくか、私の人脈から建築士を紹介するという形を取らざるを得ませんでした。

しかし、他者の設計に委ねることで、意図とのズレが生まれます。氣を通す間取りも、法を守る配置も、設計者が別の判断を下せば、思い描いた“整った空間”は実現しないのです。

私は、自分の思想を他者の図面に頼らなければならないというもどかしさに、何度も直面したのです。そう感じた私は、60歳にして建築士の資格取得に挑みました。

氣を読み、法を理解し、そして空間をつくる──

それができて初めて、人を本当に整った空間に導ける。

そう信じた私は、実務の合間を縫いながら学科と製図の試験に臨み、ついに三つの視座を自らの中に統合することができたのです。

この三つを私は、「相・法・創（そう・ほう・そう）」と名付けました。

相：風水師として“氣”を読む力。

法：宅建士として土地の法的課題を越える“法”と社会的責任。

創：建築士として“創造”でかたちにする。

これらは、単なる資格の寄せ集めではありません。

空間を通して人の人生に寄り添うには、この三位一体の思想が必要だという、現場と試練の中で導き出した“実感”からきたものです。

この章は、私の実体験と、その先にある提言を綴る章になります。

風水という名前は、科学との融合が進めば、強調しなくてもよい時代が来るかもしれません。

なぜなら、改めて「風水の氣」を語らずとも、多くの人がそれを“当然のもの”として受け入れるようになるのであれば、もはや「風水」という言葉を使う必要もなくなるからです。

ただし、その融合が実現するまでは、思想を体系として遺しておかねば、また断絶してしまいます。だからこそ、私はこの思想に「相・法・創」という名前を与えたのです。

風水を超えて、次代へつなげるために──。